

『叡智』の構造とヴェルレーヌの信仰

大 熊 薫

序 論

本論文においては、神との出会いによって創作された『叡智』(Sagesse, 1880年)の中の数篇において、宗教的実存レベルにおける彼の魂の叫びがいかなるものかを考察する。これによって、彼の魂の状態が、常に「聖」と「俗」との間を彷徨しているということを立証する。しかも、そのような彼の信仰は、そのまま『叡智』における詩篇の配置においても体现されているとわれわれは考える。

このことを明らかにするため、まず、『叡智』に収められた49篇の詩篇の創作年代をその詩篇の配置順に確認する。そこでは、これらの詩篇が『叡智』において、創作年代順には配置されていないことに気づくであろう。

次に、詩人が愛したひとり息子について歌った詩篇第一部の詩篇 XVIII「そして私はひとり子に再会した・・・」、およびマチルドを想って創作したと言われる詩篇第一部の詩篇 XVI「聞いてください かくもやさしい歌の声を」の分析を行い、その後、最終詩篇第三部の詩篇 XXI「麦の祭りだ、パンの祭りだ」を取り扱う。

これらの詩篇の分析をとおして、宗教的実存レベルにおいて「聖」と「俗」との間を大きく揺れ動いているヴェルレーヌの魂が、詩集『叡智』そのものの構造に反映しているという、これまでいかなる研究者も言及し得なかった見解を展開したい。

第一章 『叡智』における詩篇の配置について

1) 詩篇の配置と創作年代

『叡智』は三部で構成され、49の詩篇からなる。しかし、創作された年代順に各詩篇が配置されている訳ではない。以下にそれらの作品名と創作された年を全て記す。創作年代にかんしては不明の部分や曖昧な部分もあるが、それらは主に *O. P. C.* に依った¹⁾。特に詩篇の創作年代とその詩篇の配置に注目されたい。

序文：1880年7月30日

詩篇第一部

I：Bon chevalier...1875年夏、イギリス

II：J'avais peiné...1875年9月、アラス、母の家

III：Qu'en dis-tu, voyageur...1875年9月—10月、アラス、母の家

IV：Malheureux! tous les dons...1875年9月または10月

- V : *Beauté des femmes...*1875年9月20日、スティックニ
 VI : *Ó vous, comme un qui boite...*1875年夏、スティックニ
 VII : *Les faux beaux jours...*1875年10月、パリ
 VIII : *La vie humble...*1875年10月、パリ
 IX : *Sagesse d'un Louis Racine...*1875年10月 ヴェルサイユへの旅の時
 X : *Non, Il faut gallican,...* 翌日パリで
 XI : *Petits amis...* 不明
 XII : *Or, vous voici promus...*1875年10月、パリ
 XIII : *Prince mort en soldat...*1879年6月20日以降
 XIV : *Vous reviendrez bientôt...*1877年11月—1879年8月
 XV : *On n'offense que Dieu...*1879年、別れた後離婚した妻へ ルテル
 XVI : *Écoutez la chanson bien douce...*1878年
 XVII : *Les chères mains...* 同じ女性に同じ日に
 XVIII : *Et j'ai revu...*1881年6月、パリ、息子ジョルジュと会った後
 XIX : *Voix de l'Orgueil : ...*1875年夏、スティックニ
 XX : *L'ennemi se déguise...*1879年、パリ
 XXI : *Va ton chemin...*1880年、パリ
 XXII : *Pourquoi triste,...*1880年、パリ
 XXIII : *Né l'enfant des grandes villes...*1880年、パリ
 XIV : *L'âme antique...*1875年秋、アラス

詩篇第二部

- I : *Ó mon Dieu,...*1874年8月15日ベルギーのモンズ牢獄とあるが、ブレモンに宛てた手紙では1875年7月
 II : *Je ne veux plus aimer...* 同じ場所同日付。しかしブレモンに宛てた手紙では1875年8月
 III : *Vous êtes calme,...*1878年11月（確かではない）
 IV : *Mon Dieu m'a dit :...*1874年9月8日ルベルチエへ宛てた手紙で

詩篇第三部

- I : *Désormais le Sage, puni...*1875年秋、アラス
 II : *Du fond du grabat...*1874年6月、7月、モンズ
 III : *L'Espoir luit...*1873年夏、ベルギー、ジュオンヴィル
 IV : *Je suis venu, calme orphelin, ...*1873年8月、ブリュッセル（プチ・カルムの牢獄で判決の後）
 V : *Un grand sommeil noir...*1873年8月8日、ブリュッセル
 VI : *Le ciel est, par-dessus le toit,...*1873年9月、ブリュッセル、プチ・カルム
 VII : *Je ne sais pourquoi...*1873年7月または9月
 VIII : *Parfums, couleurs,...*1874年終わり、モンズ牢獄
 IX : *Le son du cor...*1872年冬、（ベルギー）ジュオンヴィル、（『言葉なき恋歌』を作っていた頃で、

【叡智】の中では最も古い作品であろう。）

X : *La tristesse*,...1875年夏、アラス

XI : *La bise se rue à travers*...1873年5月または10月

XII : *Vous voilà*,...1875年夏、アラス

XIII : *L'échelonnement des haies*... おそらく1875年、スティックニ

XIV : *L'immensité*...1875年、ロンドン

XV : *La mer est plus belle*...1876年夏、または1877年8月2日

XVI : *La < grande ville > !*...1876年3月

XVII : *Tournez, tournez*,... 【言葉なき恋歌】

XVIII : *Toutes les amours*...1887年7月、ヴァンセンヌの療養所

XIX : *Sainte Thérèse*...1888年7月

XX : *Parisien, mon frère*...1880年7月、ファンブー（但しヴェルレーヌ自身はこの詩篇の最後に1877年 アラスと記している。）

XXI : *C'est la fête du blé*... ヴェルレーヌ自身はこの詩篇の最後に1877年ファンブーと記している。ルイ・モーリスも同様にこれを認めている²⁾。

これで理解できるように、例えば詩篇第一部はモンス出獄後の1875年から80年代に創作されたものが主であるが、詩篇第二部の詩篇IV「神は私に言った」はモンス獄中のものである。また詩篇第三部は獄中に制作されたものもあれば、逮捕（1873年8月）される前の詩篇も含まれていることが確認できたであろう。

2) 作品の構成にかんするヴェルレーヌの意図

従って、上記のように、一見無秩序とも思える詩篇の構成にかんして、ヴェルレーヌに何らかの意図があったのではないかと推測する研究者もいる。例えば、ルイ・モーリスは次のように「叡智」の構造を解釈する³⁾。下線部は原文ではイタリック。

【叡智】は、実際、構造的に言えば、明確に三部からなる。その各部は詩人の人生の3段階に呼応するものではなく、——とはいえ、しばしばそれに付随するものではあるが——彼の3段階の宗教的精神状態に呼応している。第一部は・・・中略・・・新しく回心した信者と古い自己との戦いであり、第一部においては、これがまさにメインテーマである。・・・中略・・・第二部は、イエスが詩人を待っている。そこでは崇高な会話が行われ、実に神秘的である。・・・中略・・・第三部は、自然に向かって開かれており、とりわけ絵画的である。・・・中略・・・これは、もしこのような表現が可能であるとすれば、神と人との一致である。ヴェルレーヌにおいて、和解がなされたのだ。・・・中略・・・彼は新しい目で全てを見る。彼は全てを許容することができる。・・・中略・・・第三部は彼の精神生活の絶頂において、キリスト教詩人の、このような総合的広がり表現されている。

ところが、ジャック・ロビシエは、「宗教的精神状態」にふさわしくない詩篇もあるとして、ル

イ・モーリスの解釈に、積極的には同意しない⁵¹。かといって新たな解釈を提示するわけでもない。江島泰子氏もこれにかんして以下のような見解を述べる⁵²。()は原文のまま。

結局日の目を見なかった「独房での日々」の順番では、「苦しみの生」と「フィナル」の間に五つの作品がはさまっていた。後に詩集『かつてと昨今』に収められる「愛の罪」、「恩寵」、「パイプをくわえたドン・ジュアン」、「告解なしの死」、「悪魔に恋する女」である。『叡智』出版の際、著者はこれらのテキストを、改宗をテーマとしたこの詩集にふさわしくないと判断したようだ。このことは、「独房での日々」で与えられていた位置（「苦しみの生」と「フィナル」の間）を考慮するなら、以外な気がしないでもない。ことにヴェルレーヌは、自分の詩集の構成には細心の注意を払う詩人であったから、これらの作品の配置にはそれなりの理由があったはずだ。

残念なことに、江島氏も『叡智』の構成の問題に注目するものの、「作品の配置にはそれなりの理由があったはずだ」とその見解を述べるに止まっており、「それなりの理由」については、これ以上追究してはいない。

ところが、われわれは意外なところで、この構成の問題にかんする答えを発見する。以下は彼の『呪われた詩人たち』（*Les Poètes maudits*, 1884年）に見られる彼自身による興味深い記述である⁶¹。

「サビエンチア」はポーヴル・レリアンのカトリックへの回心から生まれた。・・・中略・・・詩人は作品全体が美しく立派に創作されている限り、何を書いても許されるのではないか。あるいは、統一という口実の名の下に、詩人はひとつのジャンルの中に閉じこもっていなければならないのだろうか。・・・中略・・・これらの中で、賞賛されるべき思想の統一はどうかと言われるであろう。しかし、それはそこに存在する。われわれの眼には同じことであるが、人間の名において、カトリックの名において、それは存在する。私は神を信じ、そして私は行動によってと同様、思想によって罪を犯す。私は神を信じ、そしてより良くなることを願って、思想によって後悔する。さらにまた私は神を信じ、そしてその時は、私は良い信者である。私は神を信じ、そしてその直ぐ後で、私は悪い信者となる。罪にたいする追憶、期待あるいは祈願は、悔やむ時もあればそうではない時もあるが、私を大いに喜ばせる。・・・中略・・・この喜びを、私や、あなたたちや、彼や作家たちは喜んで紙の上に記載し、多少うまく表現されようといまいと、喜んでそれを公表しているのだ。

『叡智』における詩篇の無秩序な配置の疑問にたいする答が、ここに見出される。即ち、『叡智』はカトリックという統一された思想という口実の下に創作されてはいるが、その中身にかんしては、必ずしもひとつのジャンル（宗教）の中に閉じ込めることはできないのである。

詩人の魂は、ある時は熱心にキリストと対話をし、ある時はキリストから離れ、ある時は過去の罪深い生活を懐かしみ、ある時はマチルドやひとり息子を想う。これこそまさにヴェルレーヌが「私は神を信じ、そしてその時は、私は良い信者である。私は神を信じ、そしてその直ぐ後で、私は悪い信者となる」と『呪われた詩人たち』の中で語った魂の状態が、そのまま『叡智』における詩篇の配列に反映され、詩人は「喜んでそれを公表している」のだ。

それゆえ、『叡智』を、ひとつの筋書きのあるドラマとして描く意図がヴェルレーヌには全く無かったのだ。むしろ自らの信仰がいかなるものかを率直にこの詩集をとおして公に告白しようとしたのである。

これこそが、これまでいかなる研究者も言及しなかった、『叡智』の構成にかんするわれわれ独自の解釈である。われわれはこれを立証するため、『叡智』の中から数篇の詩篇を取り上げ、彼の宗教的実存レベルにおける魂の揺れ、そしてそこから生じた彼の信仰告白がいかなるものであったかを明らかにする。

第二章 息子ジョルジュか、それともキリストか

ここで対象とする詩篇第一部の詩篇 XVIII 「そして私はひとり子に再会した。・・・」は出獄（1875年1月）後、ひとり息子ジョルジュとの再会を果たした時（1881年6月）、創作された詩篇である⁷⁾。

I-XVIII

- 1 Et j'ai revu l'enfant unique : il m'a semblé
- 2 Que s'ouvrait dans mon cœur la dernière blessure,
- 3 Celle dont la douleur plus exquise m'assure
- 4 D'une mort désirable en un jour consolé.

- 5 La bonne flèche aiguë et sa fraîcheur qui dure !
- 6 En ces instants choisis elles ont éveillé
- 7 Les rêves un peu lourds du scrupule ennuyé,
- 8 Et tout mon sang chrétien chanta la Chanson pure.

- 9 J'entends encor, je vois encor ! Loi du devoir
- 10 Si douce ! Enfin, je sais ce qu'est entendre et voir,
- 11 J'entends, je vois toujours ! Voix des bonnes pensées !

- 12 Innocence, avenir ! Sage et silencieux,
- 13 Que je vais vous aimer, vous un instant pressées,
- 14 Belles petites mains qui fermerez nos yeux !

詩篇 XVIII

- 1 そして私はひとり子に再会した。それは私に
- 2 私の心の中で最後の傷口が開くようだった
- 3 その傷の快い痛みは私に確信させた
- 4 とある慰めの日の望ましい死を

- 5 立派な鋭い矢とそのいつまでも続く冷たさよ

- 6 このとっておきの時にそれらは
 7 困ったためらいの少しばかり重い夢を呼び覚ました
 8 そしてキリスト教徒である私の血は清らかな「歌」を歌った。
- 9 私には今もなお聞こえる、今もなお見える。義務の「掟」が
 10 かくも甘いとは。ついに、私は聞こえること見えることが何かを知った
 11 私には聞こえる、私には相変わらず見えるのだ、善良な想いの声が
- 12 純潔さよ、未来よ、おとなしく黙って
 13 私はお前たちを愛するだろう、お前たちを、臨終の時に
 14 美しくかわいらしい手よ、私の手を握り私たちの瞳を閉じておくれ

ところで、マチルドはこの詩篇にかんして次のように書き残している⁸。

彼が『叡智』を書き終えたのはその頃でした。彼はモンマルトルを二度ほど訪れた後に以下の詩篇を書いたのです。

そして私はひとり子に再会した。それは私に
 私の心の中で最後の傷口が開くようだった
 その傷の快い痛みは私に確信させた
 とある慰めの日の望ましい死を

・・・・中略・・・・

そして次の詩篇は彼の最も美しいもののひとつでした。

聞いてください かくもやさしい歌の声を
 これはあなたを喜ばすためにのみ泣く歌。
 これはつつましく、しかも軽やかに
 苔の上を流れるせせらぎの音。

このように、第1詩行の「ひとり子」(enfant unique)は当然彼の幼子ジョルジュである。そのため、この「ひとり子」l'enfant uniqueはmon fils uniqueと書き換えることも可能であった。しかも音節の数もこれによって変化することはない。ところで、このunique「ひとりの」という語彙に注目しよう。

聖書では「ひとり子」という表現(fils unique)はイエスを意味する言葉である。例えば、ヨハネ3章16節では、「神は、その独り子(son Fils unique)をお与えになったほどに、世を愛された⁹⁾」、あるいは同じ18節においても、「神の独り子¹⁰⁾」(Fils unique de Dieu)など、聖書のいたるところに「独り子」という表現は見出される。

さらに第8詩行の「8 そしてキリスト教徒である私の血は清らかな「歌」を歌った。」という表

現から、この詩篇全体がキリスト教的雰囲気に含まれていることは否めない。

これらのことを考慮に入れると、この詩篇でヴェルレーヌは自分のひとり息子 *enfant unique* と神の独り子 (*Fils unique de Dieu*) イエスを重ね合わせているとも解釈できる。

その結果、この詩篇全体が、まるで神がその独り子を愛するように、ヴェルレーヌが自分のひとり子を愛していると表現しているのだ。

即ち、詩人はそのひとり息子と再会し、その喜びをこの詩篇に歌いあげた。しかしそれは同時に回心以前の自らの過去の過ちをも想起させるものである。それを「2 私の心の中で最後の傷口が開くようだった」と魂は告白する。そして、最後に自分が死ぬ時は、この愛する息子の手に握られて死にたいと願うのである。

それゆえ、ここには、永遠の神の愛というよりは、地上的愛、即ち、人間ヴェルレーヌの「俗」的な意味における願望がより強く感じられる。

しかし、ヴェルレーヌはこのような地上的魂の告白を、キリスト教的表現を用いて、換言すれば、キリスト教的ヴェールで覆い隠している。そのため、この詩篇は、息子ジョルジュに対する父親の愛と責任を歌っているにも拘わらず、表面的にはどこかキリスト教の臭いが感じられるのである。次に引用する詩篇もまた同様である。

第三章 マチルドか、それとも聖母マリアか

この同じ詩篇第一部には、詩人が愛したマチルドを想って創作したと言われる詩篇第一部の詩篇 XVI が、詩篇 XVIII 「そして私はひとり子に再会した。・・・」の前に置かれている。これが創作された年代はル・ダンテックによれば1878年である¹¹⁾。まずこの詩篇を引用する。

I-XVI

- 1 Écoutez la chanson bien douce
- 2 Qui ne pleure que pour vous plaire.
- 3 Elle est discrète. elle est légère :
- 4 Un frisson d'eau sur de la mousse !

- 5 La voix vous fut connue (et chère?),
- 6 Mais à présent elle est voilée
- 7 Comme une veuve désolée,
- 8 Pourtant comme elle encore fière.

- 9 Et dans les longs plis de son voile
- 10 Qui palpite aux brises d'automne,
- 11 Cache et montre au cœur qui s'étonne
- 12 La vérité comme une étoile.

- 13 Elle dit, la voix reconnue,

- 14 Que la bonté c'est notre vie,
15 Que de la haine et de l'envie
16 Rien ne reste, la mort venue.
- 17 Elle parle aussi de la gloire
18 D'être simple sans plus attendre,
19 Et de noces d'or et du tendre
20 Bonheur d'une paix sans victoire.
- 21 Accueillez la voix qui persiste
22 Dans son naïf épithalame.
23 Allez, rien n'est meilleur à l'âme
24 Que de faire une âme moins triste !
- 25 Elle est *en peine et de passage*,
26 L'âme qui souffre sans colère,
27 Et comme sa morale est claire !...
28 Écoutez la chanson bien sage.

詩篇 XVI

- 1 聞いてください かくもやさしい歌の声を
2 これはあなたを喜ばすためにのみ泣く歌。
3 これはつつましく、しかも軽やかに
4 苔の上を流れるせせらぎの音。
- 5 その声（なつかしいですか）をあなたは知っていました
6 けれどもその声は 今はかすれています
7 悲嘆にくれた未亡人のように
8 されど未だに気丈な声のように。
- 10 秋風にそよぐ
9 そのヴェールの長い襜の中に
12 まるでひとつの星のように
11 真実が驚く心に見え隠れしています。
- 13 聞いたことのあるその声は語っています。
14 善良さ、それこそが私たちの人生だと、
15 恨みにしても、憎しみにしても

- 16 死が訪れた時には、何も残らないと。
- 17 その声は語ります
- 18 もはや待つことのない素朴であることの栄光について
- 19 金婚式や勝負にはこだわらない
- 20 平和な優しい幸せについて
- 22 素朴な祝婚歌の中で
- 21 歌い続けるその声を受け入れてください
- 24 ひとつの魂を慰めること以上に
- 23 ほら、魂にとって素晴らしいことは他にありません。
- 25 魂は苦しんでいますがそれもつかの間のこと
- 26 魂は怒ることなく耐え忍んでいます
- 27 なんとその教えは分かりやすいのでしょうか
- 28 聞いてください、かくも賢明な歌の声を。

(下線部は原文ではイタリック)

1) 詩法についての考察

ヴェルレーヌは散文ではなく、韻文で自らの魂の告白を行った。このことに注目することは非常に重要である。多くの研究者がヴェルレーヌの詩篇の内容に関心を寄せるあまり、彼の音、音楽性についての考察がおろそかになっているきらいがある。

しかしながら、ヴェルレーヌが自己の魂を韻文で歌った以上、われわれは音を考慮に入れない詩篇の解釈は、いかにも片手落ちであると考えらる。

詩篇の内容とそれを入れる箱である詩法とは、切っても切り離せない関係にあるのだ。ヴェルレーヌ自身が「詩は何よりも音楽的でなければならない」(1 De la musique avant toute chose.) (*Art poétique in Jadis et naguère*, 『昔と近頃』(1885年刊行)における「詩法」(1874年4月作))と公言しているではないか。

それゆえ、われわれは、詩篇 XVI 「聞いてください かくもやさしい歌の声を」を、まずヴェルレーヌの詩法の観点から考察する。

これは8音綴の詩篇で、しかも脚韻の全てが女性韻で終わっている。8音綴の詩句は軽やかで音楽に最もふさわしいものであり、さらに脚韻が全て女性韻であるため、各詩行の最後の音に余韻が残る。

即ち、各詩行の最後でびしゃりと音が途切れることなく、消え入りそうな音が残ったまま、次の詩行へと音が連なるのである。そのため、この詩篇全体がゆったりと流れるようなリズムをかもしている。

第3詩行の *discrète* 「つつましい」、あるいは *légère* 「軽やかな」、あるいは第4詩行の *frisson* 「せせらぎの音」などの語句もこの穏やかさを感じさせるのに有効である。

またこのようなゆったりした音の連続性は、第5詩節の長い句またぎによっても、その効果を上げ

ている。下線（筆者による）部が示すその長い句またぎに注目しよう。

- 17 Elle parle aussi de la gloire
 18 D'être simple sans plus attendre,
 19 Et de noces d'or et du tendre
 20 Bonheur d'une paix sans victoire.

第18詩行および第20詩行に見られるように、1詩行全体にわたって句またぎが行なわれている。このような長い句またぎも、この詩節の途切れない連続性、即ち、教会内部で聖歌隊によって歌われるグレゴリウス聖歌のごとき響きを聞く者に感じさせる。

グレゴリウス聖歌では、段落感をつけるという意味から、一応休みに似た全体の句切りはあるが、それ以外は息継ぎの場所が定められていないため、聖歌隊のメンバーは各自がばらばらに息継ぎをする。そのため、聖歌は途切れることがなく、綿々と続けられるのである。

次に句切りについてであるが、一般には8音綴の詩句の場合、句切りは無く一気に1詩行を読み終えると考えられている。その場合、強調される音節は詩行の最終語句だけとなる。

しかし、鈴木信太郎は「8音綴、7音綴、6音綴の詩句においても、内部に句切りが有るのが寧ろ普通である¹²⁾」と唱える。グラモンもまた同様である¹³⁾。

古いフランス語では、8音綴の詩句において句切りはない。しかし、内部には強く強勢される音節が少なくとも常にひとつはある。近代のフランス語の場合、自由な句切りがひとつ、ときにはふたつある。

このように、8音綴の詩句の内部にも句切りがあるとグラモンは主張する。われわれもヴェルレーヌのこの詩句を読む時、これを一気に読むことも可能であるが、やはりその内部に句切りがあることを認める。

これが、われわれが言うところの「グレゴリウス聖歌における、段落感をつけるという意味から、一応休みに似た全体の句切り」に相当するとも言えるであろう。それは以下の通りである。

- 1 Écoutez / la chanson / bien douce
 3 3 2
 2 Qui ne pleure / que pour vous plaire.
 4 4
 3 Elle est discrète, / elle est légère :
 4 4
 4 Un frisson d'eau / sur de la mousse !
 4 4

- 5 La voix vous fut / connue (et chère?),
4 4
- 6 Mais à présent / elle est voilée
4 4
- 7 Comme une veuve / désolée,
5 3
- 8 Pourtant comme elle / encore fière,
4 4
- 9 Et dans les longs plis / de son voile
5 3
- 10 Qui palpite aux brises / d'automne.
6 2
- 11 Cache et montre au cœur / qui s'étonne
5 3
- 12 La vérité / comme une étoile.
4 4
- 13 Elle dit, / la voix reconnue.
3 5
- 14 Que la bonté / c'est notre vie.
4 4
- 15 Que de la haine / et de l'envie
4 4
- 16 Rien ne reste, / la mort venue.
4 4
- 17 Elle parle aussi / de la gloire
5 3
- 18 D'être simple / sans plus attendre,
4 4
- 19 Et de noces d'or / et du tendre
5 3
- 20 Bonheur / d'une paix / sans victoire.
2 3 3
- 21 Accueillez / la voix qui persiste
3 5
- 22 Dans son naïf / épithalame.
4 4
- 23 Allez, / rien n'est meilleur / à l'âme
2 4 2

- 24 Que de faire une âme / moins triste !
 6 2
- 25 Elle est *en peine* / et de passage,
 4 4
- 26 L'âme qui souffre / sans colère,
 5 3
- 27 Et comme sa morale / est claire !...
 6 2
- 28 Écoutez / la chanson / bien sage.
 3 3 2

以上に見られるとおり、句切りは非常に不規則である。この不規則性が音楽のリズムにおける流動性を一層高めている。

さらに、これこそが自然界における不規則な流れを、即ち、詩篇全体が「4 苔の上を流れるせせらぎの音」であることを暗示しているのだ。詩人の魂はこのような声=音楽をとおして別れた妻、マチルドに語りかけている。

2) 告白する魂の移行から見えてくるもの

ルイ・モーリスはこの詩篇にかんして次のように語る¹⁴。< >は原文のまま。

1878年9月に創作されたこの詩篇はマチルドに送られた。彼女はその「我が生涯の思い出」において、これを<彼の最も美しいもののひとつ>だと評している。

これにかんしては、既にマチルドの証言を引用したが、ここに再度その一部を示す。下線は筆者による。

そして次の詩篇は彼の最も美しいもののひとつでした。

聞いてください かくもやさしい歌の声を
 これはあなたを喜ばすためにのみ泣く歌。
 これはつつましく、しかも軽やかに
 苔の上を流れるせせらぎの音。

また、ジャック・ロビシェはこの詩篇にかんして次のようにその印象を語る¹⁵。

ヴェルレーヌは9年後に「よき歌」の魅力を再び見出した。彼はそれを第1詩行および第28詩行において直接想起させている。彼は第22詩行において、その「よき歌」を明確に表現している。マチルドを感動させたいという希望が少しでも残っていたならば、それは実際、彼女の心を捉えた詩篇を彼女に思い起こさせることであった。

このように、両者ともこの詩篇はマチルドを想って創作されたものと解釈している。ところで、本論文の第二章「息子ジョルジュか、それともキリストか」で分析の対象とした詩篇第一部の詩篇 XVIII「そして私はひとり子に再会した。…」において、われわれは、「この詩篇は、息子ジョルジュに対する父親の愛と責任を歌っているにも拘わらず、表面的にはどこかキリスト教の臭いが感じられるのである」とわれわれ独自の論を展開した。これと同様の解釈が、この詩篇においても可能である。

即ち、ルイ・モーリスは単に「この詩篇はマチルドに送られた」とだけ述べるに止まっている。ジャック・ロビシエは「マチルドを感動させたいという希望」をこの詩篇の中に見出している。

しかしながら、それ以上のものがこの詩篇の中にあるということをわれわれは主張する。それは、対他的実存レヴェルにおいて、マチルドの愛を取り戻そうと思いつつも、詩人の魂はいつの間にか宗教的実存レヴェルに向かっているのだ、あるいは、読者に敢えてそのように感じさせているのだという解釈である。

即ち、まず、第1詩節「1 聞いてください かくもやさしい歌の声を / 2 これはあなたを喜ばすためにのみ泣く歌。 / 3 これはつつましく、しかも軽やかに / 4 苔の上を流れるせせらぎの音」において、これを詩人の宗教的実存レヴェルと結びつけることは強引である。

しかし第2詩節の「7 悲嘆にくれた未亡人のように」における「未亡人」とはキリストを失った聖母マリアを少しばかりは連想させるのではないだろうか。いやそうではないとの反論はあるかも知れないが、第3詩節における「9 そのヴェールの長い襜の中に」は、敬虔な未亡人、あるいは聖母マリアの教会におけるイマージュをやはり連想させるものがある。

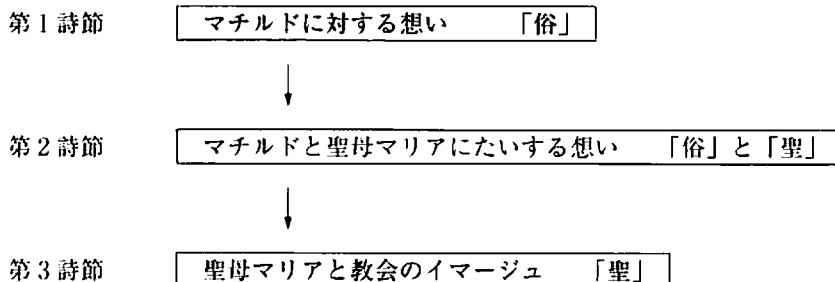
第4詩節に移行すると、「14 善良さ、それこそが私たちの人生だと」に見られるように、少しずつ宗教的実存レヴェルにおけるヴェルレーヌの魂が顔を覗かせて来る。

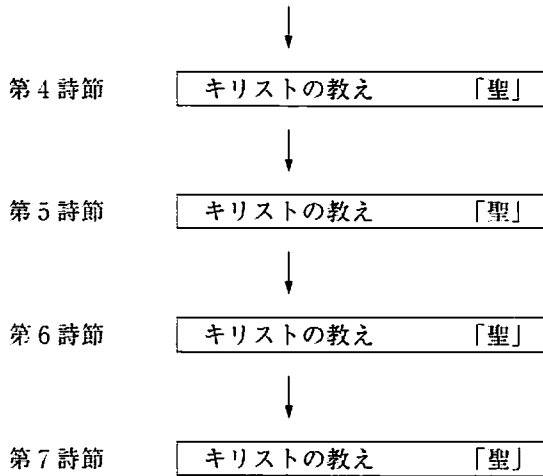
第5詩節における「18 もはや待つことのない素朴であることの栄光について」はまさにキリストが説く貧しさの教えである。

第6詩節において、「24 ひとつの魂を慰めること以上に / 23 ほら、魂にとって素晴らしいことは他にありません」と歌うことで、キリストの教えによって慰められる魂の喜びが表現されている。

このように解釈していくと最終詩節における「27 なんとその教えは分かりやすいのでしょうか」は、キリストの説く教えであると解釈できる。特に「25 魂は苦しんでいますがそれもつかの間のこと」(下線部は原文ではイタリック)に見られるイタリックは、地上の苦しみもやがては聖母マリアによって慰められるであろうという詩人の希望を強調したものとも捉えることができる。

このような魂の移動を図式化すると以下のようなようになるであろう。





以上のような「俗」から「聖」への、換言すれば、対他的実存レベルにおける魂から宗教的実存レベルにおける魂への移動がこの詩篇に見られる。

この詩篇全体が、マチルドの離れた心を取り戻すために創作されたものであるという解釈と同時に、詩人の魂はいつの間にか、マチルドから聖母マリアへと移行しているとの解釈もこの図式によって可能となる。

『よき歌』(*la Bonne Chanson*, 1870年)において、マチルドは「後光の射す聖女」(詩篇 VIII)にまで祭り上げられていた。

VIII

- 1 Une Sainte en son auréole
- 2 Une Châtelaine en sa tour,

詩篇 VIII

- 1 後光の射す聖女
- 2 塔の中の奥方

このように、恋する女性の心を掴もうとして歌われた『よき歌』が、『叡智』におけるこの詩篇において、再び復活したのだ。

ここでは、マチルドに気に入られようとする魂と聖母マリアに気に入られようとする魂とが、次第に重なり合って、最終詩節を迎えたのである。

以上の解釈は、この詩篇を強引にキリスト教と結びつけるためのものではない。しかしながら、この詩篇全体に、その内容の点からも、さらには詩法にかんする考察において、この詩篇にグレゴリウス聖歌のごとき音楽性を見出した点からも、キリスト教の臭いが漂っていることは否めない。

ヴェルレーヌはマチルドを愛し、彼女の愛を取り戻したいという地上的欲望を持った魂の叫びを、即ち「俗」なるものを、キリスト教的ヴェールで、即ち「聖」なるもので覆い隠しているとも言える

であろう。

このような魂の声を歌に乗せてマチルドに捧げるこの詩篇は、聖母マリアというヴェールを重ね合わせた時、一種の祈りともなる。この祈りがグレゴリウス聖歌のように、途切れなく続く音楽として聞く者の心に響くのである。

第四章 最終詩篇に見られるヴェルレーヌの信仰

ここで取り扱う詩篇第三部の詩篇 XXI 「麦の祭りだ、パンの祭りだ」はヴェルレーヌがこの詩篇の下に記した年代によれば、1877年創作されたものであり、本論文の第三章で分析した詩篇第一部の詩篇 XVI 「聞いてください かくもやさしい歌の声を」(1878年)よりも前に創作されている。

このような、創作年代を無視したヴェルレーヌの無秩序な詩篇の配置は、彼のキリスト教信仰のありかたと無縁ではない。

III-XXI

- 1 C'est la fête du blé. c'est la fête du pain
- 2 Aux chers lieux d'autrefois revus après ces choses !
- 3 Tout bruit, la nature et l'homme. dans un bain
- 4 De lumière si blanc que les ombres sont roses.

- 5 L'or des pailles s'effondre au vol siffleur des faux
- 6 Dont l'éclair plonge. et va luire, et se réverbère.
- 7 La plaine. tout au loin couverte de travaux.
- 8 Change de face à chaque instant, gaie et sévère.

- 9 Tout halète, tout n'est qu'effort et mouvement
- 10 Sous le soleil. tranquille auteur des moissons mûres,
- 11 Et qui travaille encore. imperturbablement.
- 12 À gonfler, à sucrer — là-bas ! — les grappes sûres.

- 13 Travaille, vieux soleil, pour le pain et le vin,
- 14 Nourris l'homme du lait de la terre. et lui donne
- 15 L'honnête verre où rit un peu d'oubli divin...
- 16 Moissonneurs, — vendangeurs là-bas ! — votre heure est bonne !

- 17 Car sur la fleur des pains et sur la fleur des vins,
- 18 Fruit de la force humaine en tous lieux réparti.
- 19 Dieu moissonne, et vendange. et dispose à ses fins
- 20 La Chair et le Sang pour le calice et l'hostie !

Fampoux, 77.

詩篇第三部 XXI

- 1 麦の祭りだ、パンの祭りだ
- 2 あんなことの後で再び見たかつての懐かしい所で
- 3 自然も人も、あらゆるザ・ワ・メ・キが かくも白い光の中で
- 4 陰もバラ色に染まるほど。

- 5 麦藁の黄金は鎌の一振りに倒れ落ち
- 6 その輝きは消えたり、光ったり、反射したり
- 7 平原はずっと向こうまで働き手に満ち満ちて
- 8 その時々姿を変える。時に愉快に時に厳しく

- 9 太陽の下で、すべては喘ぎ、すべては厳しい労働
- 10 その太陽は実りある収穫の穏やかな作り手
- 11 そして、それはまだ悠然として働く
- 12 酸っぱい葡萄の房を あそこで たわわに実らせ、甘くするため

- 13 働くのだ、昔なじみの太陽よ、パンとぶどう酒のため
- 14 大地の乳で人を養え、そして人に与えよ
- 15 神を少しばかり忘れて笑う旨き杯を。
- 16 あそこで葡萄を摘み取る収穫者たちよ、あなたたちの時は満ちた

- 17 なぜならパンの花の上、ぶどう酒の花の上にも
- 18 あまねく分配された人の力の結晶を
- 19 神は刈り取り、摘み取り 御旨に沿って食卓に整える
- 20 聖杯と聖体のためその「肉」とその「血」を

ファンプー、77年

1) 地上の楽しみから聖なるものへ

ファンプーにかんして、ジャック・ロビシエは次のように言及している¹⁶⁾。

ファンプーはヴェルレーヌに1869年夏の幸せな日々を何よりもまず想起させる。そこで彼は「よき歌」の詩篇をマチルドのために書き始めたのだ。

ルイ・モーリスは、ヴェルレーヌの手紙をもとにして、次のように言う¹⁷⁾。()は原文のまま。

牢獄から出て（1875年1月16日）、母親とともに引きこもったところがファンブーである。

確かにヴェルレーヌは1875年1月25日付けの手紙で、ルベルチエに次のように語っている¹⁸⁾。（ ）は原文のまま。

僕は今月の16日からここに家族で過ごしている。素晴らしい親戚の家で母と共に。次にいつかに戻るか、その可能性さえもはっきりとは言えない。ここでは皆が僕たちにとてもよくしてくれる。田舎の空気を、たとえそれが北の空気であっても、吸い込むのが賢明だ。そのため、僕はぎりぎりになってしか大都会には戻りたくないのだ。

「手紙 LXIV ファンブー（パ・ド・カレ）、ジュリアン・ドレ氏の家、アラスの側」

このように、ファンブーはヴェルレーヌにとって、心休まる田舎であったに違いない。第2詩行の「再び見たかつての懐かしい所で」がそのことを物語っている。同じく第2詩行の「あんなことの後で」にかんして、ルイ・モーリスは「追放の長い月日をほのめかしている¹⁹⁾」と指摘する。ルイ・アゲッタンも同様である²⁰⁾。「 」は原文ではイタリック。

「あんなこと」は彼の人生の暗い側面を敢えて曖昧に示すものである。

確かに、第1詩節はヴェルレーヌが愛する田舎の明るい雰囲気に満ち溢れている。さらに第3詩行の bruit「ざわめき」は分音（diérèse）されるため、その「ザ・ワ・メ・キ」の大きさが強調されることとなる。いかにも楽しげで活気に満ちた風景描写である。

第2詩節も同様に、収穫の喜びと厳しさが歌われている。第6詩行の「6 その輝きは消えたり、光ったり、反射したり」は刈り取る刃の連続する運動を表している。[s]、[f]、[v]などの子音の繰り返し、さくさくと麦を刈り取る音の効果を表現するのに有効であることは、アゲッタンも指摘している²¹⁾。

第3詩節もまた、人間の労働の厳しさが歌われている。それとは反対に、自然である太陽は「11 そして、それはまだ悠然として・・・」働き、「12 酸っぱい葡萄の房を・・・たわわに実らせ、甘く」すると、ヴェルレーヌは人間の労働の厳しさとゆったりした太陽の働きとを対比させる。このように第3詩節までは、田舎の畑の風景とそこで働く人びとの風景描写で満たされていたが、次の詩節からその内容が少しずつ変化していく。

第4詩節においては、地上で生きるために必要なパンと葡萄酒に詩人の思いは移行する。「15 神を少しばかり忘れて笑う旨き杯を」は、パンと葡萄酒の源である神を少しの間忘れて、旨い酒を酌み交わそうという一種のカルペ・ディエム²²⁾でもある。

ところで、ここで興味深いのは、突然、神が登場したことである。これまでの詩節では、自然の美しさと人間の労働の楽しさや厳しさを歌っていた。しかしここに至って、キリスト教徒である詩人は、それら全ての源は神であることを悟るのである。

第16詩行の Moissonneurs「収穫者たち」も聖書では、神や布教活動を行なうキリストの弟子たちを指し示す常套句である。しかしその神に感謝するよりも、今は旨い酒を飲んで、収穫の喜びを体全体

で味わおうというのだ。そしてこの神が伏線となり最終詩節に繋がっていく。

最終詩節は、完全にミサにおける聖変化のイメージである。「あまねく分配された人の力の結晶を神は刈り取り、摘み取り、御旨に沿って聖杯と聖体のためその「肉」とその「血」を食卓に整える」とは、「神は人間の労働の結果であるパンと葡萄酒を祝福し、その食卓である祭壇の上で、それをキリストの「肉」とキリストの「血」とに、聖変化させる」との意である。

ところが、このような意を持つ最終詩節に至るまでには、第1詩節から既にその暗示があった。即ち、まず、パンの祭り（第1詩節）、麦の収穫（第2詩節）、次に葡萄の収穫（第3詩節）、パンと葡萄酒（第4詩節）および神や聖職者たちを意味する「収穫者」たち、そしてこれら全てが最終詩節においてキリストの聖体である「肉」と「血」に収斂するのである。

さらに、第12、および第16詩行における「あそこ」は、第19詩行における「食卓」＝「祭壇」へと導く暗示でもある。

かくして、この詩篇もこれまでの詩篇同様、全体がキリスト教的雰囲気満ちたものとなったのである。

次にこの詩篇における詩法についての考察を行う。なぜならば、先にも述べたとおり、詩篇が表現しようとする意味空間と、それを入れている箱である詩法との関係は切り離すことができないとわれわれは考えるからである。

2) リズムについて

この詩篇はアレクサンドランであるが、伝統的な句切り（6 / 6）が行われている箇所は極めて少ない。以下にそれを示す。

- | | | | | | | | |
|---|-----------------------------|---|----------------------------|---|------------------|---|--------------|
| 1 | C'est la fête du blé, | / | c'est la fête du pain | | | | |
| | 6 | | 6 | | | | |
| 2 | Aux chers lieux d'autrefois | / | revus après ces choses ! | | | | |
| | 6 | | 6 | | | | |
| 3 | Tout bruit. | / | la nature | / | et l'homme, | / | dans un bain |
| | 3 | | 3 | | 3 | | 3 |
| 4 | De lumière si blanc | / | que les ombres sont roses. | | | | |
| | 6 | | 6 | | | | |
| 5 | L'or des pailles s'effondre | / | au vol siffleur des faux | | | | |
| | 6 | | 6 | | | | |
| 6 | Dont l'éclair plonge, | / | et va luire, | / | et se réverbère. | | |
| | 4 | | 3 | | 5 | | |
| 7 | La plaine. | / | tout au loin | / | couverte | / | de travaux. |
| | 3 | | 3 | | 3 | | 3 |
| 8 | Change de face | / | à chaque instant, | / | gaie et sévère. | | |
| | 4 | | 4 | | 4 | | |

- 9 Tout halète. / tout n'est qu'effort / et mouvement
4 4 4
- 10 Sous le soleil. / tranquille auteur / des moissons mûres,
4 4 4
- 11 Et qui travaille encore, / imperturbablement.
6 6
- 12 À gonfler, / à sucrer / — là-bas ! / — les grappes sûres.
3 3 2 4
- 13 Travaille, / vieux soleil, / pour le pain / et le vin.
3 3 3 3
- 14 Nourris l'homme / du lait de la terre, / et lui donne
4 5 3
- 15 L'honnête verre où rit / un peu d'oubli divin...
6 6
- 16 Moissonneurs, / — vendangeurs là-bas ! / — votre heure est bonne !
3 5 4
- 17 Car sur la fleur des pains / et sur la fleur des vins,
6 6
- 18 Fruit de la force humaine / en tous lieux répartie.
6 6
- 19 Dieu moissonne, / et vendange, / et dispose à ses fins
3 3 6
- 20 La Chair et le Sang / pour le calice et l'hostie !
5 7

以上のように、そのリズムは非常に不規則である。この飛び跳ねるようなリズムは詩人の魂の喜びを表現するのにきわめて有効に働いている。

とりわけ第11詩行の、わずか1語で6音節からなる *imperturbablement* 「悠然と」は、句切りの後に置かれているため、強勢されるものであるが、これは第9詩行の *mouvement* 「厳しい労働」と好対照をなすものである。これもまた、人間の労働と太陽（自然）の労働との対比を効果的に歌っている。

その他、この詩篇においては、意味における対照法もいくつか見られる。それを次に検証する。

3) 意味における対照法

第1詩節

第3詩行 *la nature / l'homme* (自然 / 人間)

第4詩行 *lumière / ombres* (光 / 影)

第2詩節

第6詩行 l'éclair plonge / va luire / se réverbère (光の陰影)

第8詩行 gaie / sévère (陽気さ / 厳しさ)

第3詩節

第9詩行 mouvement / 第10詩行 tranquille / 第11詩行 imperturbablement (動 / 静)

第12詩行 sucrer / sûres (甘い / 酸っぱい)

最終詩節

第17詩行 pains, vains / 第20詩行 Chair, Sang (地上の食物 / キリストの聖体)

これら相反する意味を持つ語彙があちらこちらに配置され、それぞれが共に強調されている。

4) 様々な感覚によって表現された生きる喜び

さらにここには様々な感覚によって、生きる喜びが歌われていることにも注目しよう。

第1詩節

第3詩行 bruit (聴覚)

第4 - 第5詩行 un bain De lumière (視覚)

第2詩節

第5詩行 L'or des pailles (視覚)

第5詩行 vol siffleur (聴覚)

第6詩行 l'éclair plonge / va luire / se réverbère (視覚)

第3詩節

第9詩行 halète (聴覚)

第12詩行 sucrer / sûres (味覚)

第4詩節

第13詩行 pains / vins (味覚)

第15詩行 L'honnête verre (味覚)

以上のように、ヴェルレーヌは人間の持つ様々な感覚を体いっぱいを使って、生きる喜びを歌いあげている。このような人生の喜びの感情が不規則なリズムで表現されているのだ。

とりわけ、最終詩行における5 / 7という不規則なリズムは、地上のものを聖なるものへと変化させる神秘を前にしたヴェルレーヌの驚き、あるいは畏敬の念の表れでもある。

このように、この詩篇において、ヴェルレーヌは、人生の喜びと人間の労働も、最終的には神がそ

れら全てを秘蹟によって、聖なるものへと変化させるのだと表現している。このような「聖」と「俗」との共存がこの詩篇においては確認できたのである。

結 論

本論文の第一章においては、『叡智』における各詩篇の配置が、それぞれの創作年代順には配置されていないことを確認した。その結果、このような一見無政府状態とも思われる詩篇の配置にかんして、筋書きのあるドラマとしてこの『叡智』を捉えようとする批評家もいれば、問題提起する研究者もいたが、いずれも明確な回答は示してはいなかった。

ところが、われわれはこれにかんして、『呪われた詩人たち』の中に、ヴェルレーヌ自身の回答を見出した。それは次のようなものであった。即ち、「私は神を信じ、そして私は行動によってと同様、思想によって罪を犯す。私は神を信じ、そしてより良くなることを求めて、思想によって後悔する。さらにまた私は神を信じ、そしてその時は、私は良い信者である。私は神を信じ、そしてその直ぐ後で、私は悪い信者となる」

われわれは、ヴェルレーヌ自身によるこの証言を拠り所とし、ヴェルレーヌの信仰が「聖」と「俗」との間を揺れ動く様を、彼の数篇の詩篇から読み取ろうと試みた。

その結果、第二章「息子ジョルジュか、それともキリストか」においては、自分のひとり息子への地上的愛を、キリスト教的ヴェールで包み隠したヴェルレーヌの詩法が見られた。

第三章「マチルドか、それとも聖母マリアか」も同様に、離れて行ったマチルドの心を再び取り戻そうとする「俗」なる心が、やはりキリスト教的ヴェールで、即ち「聖」なるものによって包まれていた。

そして第四章における最終詩篇「麦の祭りだ、パンの祭りだ」では、「俗」なるものを体全体で謳歌しながらも、最後にはこれを神が秘蹟によって「聖」なるものへと昇華してくれると歌うヴェルレーヌの魂を見た。これが、全てを祝福し、全てを赦すという神の寛大さにたいするヴェルレーヌの信仰なのだ。

このように、本論文において分析の対象とした詩篇第一部の詩篇 XVIII「そして私はひとり子に再会した。・・・」、詩篇第三部の詩篇 XVI「聞いてください かくもやさしい歌の声を」および詩篇第三部の最終詩篇「麦の祭りだ、パンの祭りだ」のいたるところに「聖」と「俗」との共存が見られた。

その結果、『叡智』における一見、無秩序とも思える詩篇の配置にかんして、われわれは次のような結論を導き出すことができるであろう。

即ち、『叡智』における詩篇の構成にかんして、ヴェルレーヌは何らかの筋書きのあるドラマとして各詩篇を配置したのではない。

「私は神を信じ、そしてその時は、私は良い信者である。私は神を信じ、そしてその直ぐ後で、私は悪い信者となる」そして「この喜びを、私や、あなたたちや、彼や作家たちは喜んで紙の上に記載し、多少うまく表現されているようにいまいと、喜んでそれを公表しているのだ」と彼自身が語るように、ヴェルレーヌは宗教的実存レベルにおける自らの魂の揺れ、即ち、神にたいする自己の魂が「聖」と「俗」との間を揺れ動いている状態を、そのまま表現するのに最もふさわしい形態として、『叡智』において、それぞれの詩篇を取って無秩序に配列したのだ。

このような宗教的実存レベルにおけるヴェルレーヌの信仰の状態が、この無秩序な詩篇の配列に

よって、そのまま『叡智』の構成に反映されているのであり、これこそがまさにヴェルレーヌが意図した『叡智』の構成なのである。

註

本文中におけるヴェルレーヌの詩篇の引用はすべて、Verlaine, *Œuvres poétiques complètes*, texte établi et annoté par Y.-G. Le DANTEC, édition révisée et complétée et présentée par Jacques BOREL. Bibliothèque de la Pléiade, Éditions Gallimard, 1962による。

なお、聖書の日本語訳は『聖書 新共同訳』、日本聖書協会、1990年による。またフランス語版の聖書は *La Bible de Jérusalem, La sainte Bible* traduite en français sous la direction de l'École biblique de Jérusalem, Nouvelle édition entièrement revue et augmentée, Les Éditions du Cerf, 1978を使用した。

略号は以下のとおり。

O. P. C. : Verlaine, *Œuvres poétiques complètes*, texte établi et annoté par Y.-G. Le DANTEC, édition révisée et complétée et présentée par Jacques BOREL. Bibliothèque de la Pléiade, Éditions Gallimard, 1962

O. en P. C. : Verlaine, *Œuvres en prose complète*, texte établi, présenté et annoté par Jacques BOREL. Bibliothèque de la Pléiade, Éditions Gallimard. 1972

O.P. : Jacques ROBICHEZ, *Œuvres poétiques de Verlaine*, Éditions Garnier Frères. 1969

Cor. : *Correspondance de Paul VERLAINE*, publiée sur les manuscrits originaux avec une préface et des notes par Ad. Van BEVER. tome 1, 2, 3, Réimpression de l'édition de Paris, 1922-1929. Slatkine Reprints, Genève-Paris, 1983

1) *O. P. C.*, pp.1117-1138

2) Louis MORICE, *Verlaine, Sagesse*. Librairie Nizet, 1968, p.499

3) *Ibid.*, pp.20-22

4) Jacques ROBICHEZ, *O.P.*, p. 172

5) 江島泰子、『世紀末のキリスト』国書刊行会、2002年、p.251

6) *Les Poètes maudits*, in *O en P. C.*, pp.688-689

7) *O. P. C.*, p.1122

8) Ex-Madame Paul Verlaine, *Mémoires de ma vie*, Collection dix-neuvième, Éditions Champ Vallon, 1992, pp.185-186

9) *Jean III*, 16 : Car Dieu a tant aimé le monde qu'il a donné son Fils unique, . . .

10) *Jean III*, 18 : au Nom du Fils unique de Dieu,

11) *O. P. C.*, p.1122

12) 鈴木信太郎、『フランス詩法 上』白水社、1970年、p.107

13) Maurice GRAMMONT, *Petit traité de versification française*. Collection U, Librairie Armand Colin, 1965, p.43

14) Louis MORICE, *op. cit.*, p.187

- 15) Jacques ROBINCHÉZ, *O. P.*, p.606
- 16) *Ibid.*, p.628
- 17) Louis MORICE, *op. cit.*, p.503
- 18) *Cor.*, p.164
- 19) Louis MORICE, *op. cit.*, p.503
- 20) Louis AGUETTANT, *Verlaine, le bonheur de lire*, Les Éditions du Cerf, 1978, p.218
- 21) *Ibid.*, p.219
- 22) *carpe diem* : ホラチウスの詩「今日一日を摘み取れ、その時を摘み取れ」から来たもので、エピクロスの思想に根ざしたもの。「人生は短いので、現在を楽しめ」という意味で、この語をここでは用いた。

La structure de *Sagesse* et la foi de Verlaine

OKUMA Kaoru

Le but de ce mémoire est d'éclaircir la relation entre la structure de *Sagesse* et la foi de Verlaine. En apparence seulement, il semble que les poèmes de *Sagesse* ne répondent à aucun ordre précis, ce qui a pu conduire certains commentateurs, comme Louis MAURICE, à essayer de trouver dans cette absence de structure le drame de «psychologie religieuse»¹⁾.

Mais Jacques ROBICHEZ conteste cette idée en disant que *Sagesse échappe assez souvent à la «psychologie religieuse»*²⁾, sans pourtant aller plus loin dans son analyse.

Concernant cette énigme de la disposition des poèmes, nous avons cependant trouvé un témoignage de Verlaine lui-même qui, dans son œuvre, *Les Poètes maudits*, écrit : *Ou bien encore, je crois, et je suis bon chrétien en ce moment : je crois et je suis mauvais chrétien l'instant d'après*³⁾.

En nous basant sur cette confession, nous avons cherché à découvrir l'état de la foi verlainienne dans ses trois pièces, *I-XVIII : Et j'ai vu l'enfant unique...* *I-XVI : Écoutez la chanson bien douce...*, et *III-XXI : C'est la fête du blé...*

Nous avons vu dans le poème *I-XVIII : Et j'ai vu l'enfant unique...* que, tout en écrivant sur son fils unique, Verlaine a couvert son désir terrestre par le voile chrétien.

Le poème *I-XVI : Écoutez la chanson bien douce...* a été composé pour son épouse Mathilde dont il est séparé. Or, à travers l'image de la jeune femme, c'est celle de la Vierge Marie qui apparaît et constitue le thème central.

Ainsi, dans le poème *III-XXI : C'est la fête du blé...* Verlaine transforme une célébration terrestre du pain et du vin en allégorie du Corps du Christ.

Dans l'étude de ces trois poèmes, nous nous sommes assurés de la présence de ces deux phases, la laïcité et la chrétienté. Rappelons ces mots de Verlaine; *je crois et je suis mauvais chrétien l'instant d'après*, et voyons comment la structure de *Sagesse* reflète délibérément l'état de sa foi.

notes :

1) Louis MAURICE, *Verlaine, Sagesse*, Librairie Nizet, 1968, p.499

2) Jacques ROBICHEZ, *O.P.*, p. 172

3) *Les Poètes maudits*, in *O en P. C.*, p.689